

## 手許に残る総理のメモ

桜内 義雄

私が自由民主党の幹事長に就任したのは、四十日の党内抗争のあと、大平総裁の指名によるものであった。長くつづいた党内の抗争に、さぞお疲れになっておられること思ったが、総裁は、いつもの茫洋たる風貌で、元気に、淡々とされていた。福島県の政経文化パーティーに出かけた時のことである。晴れ上がった窓外には、刈り取った田んぼにやわらかな陽光がふりそそぎ、冬とは思われぬ、なんとなく気持のやわらかい日であった。総裁は相変らず読書をされておった。ふと気がつく和本を手にしたまま外の景色をみながら総裁が口笛をふいておられるのである。それが讚美歌の一節であって、ああ総裁はクリスチャンだったな、と思った。

予算編成、国会審議、総理の外遊、浜田幸一・宇野亨問題、参議院議員選挙の準備等で六カ月間はあわたたしく経っていった。参議院議員選挙を半月後に控えた五月の中旬、選挙目当ての野党の内閣不信任案提出は必至の情勢となった。しばらく嘯りをひそめていた党内の対立も徐々に高まりをみせ、総裁ははじめ党執行部の懸命の調整が続けられた。そのような状況下の五月十六日午後、総裁と刷新連代表との会見がセットされた。前日に議員総会があり、倫理憲章を決め、姿勢を正して、全党一致で参院選に臨むことになっていた。刷新連の代表から、「総裁に会いたい、これで締めくくりとしたい」との申し出があり、総裁は「会ってもよい」ということで、その機会を持つことになったのである。

総裁はじめ私どもが院内大臣室で待っていると、十人くらいの議員の方々がみえ、浜田君を喚問せよ、KDD

の不祥事件を徹底的に解明せよ、田中副幹事長の言動は何か、という抗議で、さらには時間を切つての回答を迫るといふ強硬なものであった。はじめ、総裁が回答要旨を口頭で述べられ、私がメモをとっていたが、なんと思われたのか、ご自身でペンをとり、さらさらと三項目の回答を書かれた。本会議の予鈴直前のことである。

私は直ちに、三枚のメモ用紙に書かれた回答を刷新連の代表に伝達した。しかし、残念ながらこのような努力にもかかわらず、わが党議員の多数の欠席により不信任案可決という事態になってしまった。現在そのメモが手許にあり、その書かれた当時の緊迫した様子が目のあたりに浮かぶのである。メモ内容は次のとおり。

一、浜田喚問については、国会の国政調査権の行使に十分留意の上、航特委において、国会の権威にふさわしい結論を出すよう、総裁は執行部に指示する。

二、国会に綱紀肅正委員会を設ける件については、執行部で、真剣に検討するよう指示する。

三、田中発言については、事実を調査の上、もし御指摘のような事実があれば取消させることとする。

五月三十日の参議院選挙告示の日に、総裁は倒れられた。衝撃的なことであった。経過がよろしいといつので、六月三日お見舞いにかがった。「如何でございますか」と申し上げると、手を差しのべられた。私は「選挙は順調に進み、心配はありません」と申し上げた。総裁は「ご苦労かけるな、しっかり頼む。なんとしても勝つ」と激励のお言葉があり、さらに十分に手をつくすように具体的な指示があった。細い声だったので、私は一言も聞きもらさないようにつとめた。総裁が、いろいろ心配されておられるのが切々と私の胸にひびいた。

この四、五分間のお話は、その後の選挙戦の展開の上に大きな影響のあったことで、総裁は、病床にありながら、ほんとうに国政のこと、選挙のことを念じておられたのだと、あらためて思ったのである。

総裁のご冥福を祈つてやみません。

(衆議院議員・自由民主党幹事長)